

# 研 究 紀 要

〔 5 1 〕

平成 3 1 年 3 月

大阪府立中央聴覚支援学校

## 目次

1. 校内研究会報告 ……研究部
2. 子どもが主体的に遊び、学びに向かう力を育む保育づくり ……幼稚部
3. 主体的・対話的で深い学びの実現～小学部での取り組み～ ……小学部
4. 中学部の生徒にとっての主体的・対話的で深い学びとは ……中学部
5. 高等部の研究活動について ……高等部
6. 「伝えたい」思いがふくらむ実践とは  
～寄宿舍での研修を通じて探る～ ……寄宿舍
7. <第52回全日本聾教育研究大会（北海道大会）>  
「聴覚支援学校における合理的配慮の視点を導入した授業づくり  
～大阪府立中央聴覚支援学校小学部の取り組み～ ……小学部 山口 亜希子

※本紀要の用字・用語につきましては、「教育要領」「学習指導要領」を基本とし、大阪府やろう教育特有の表記を織り交ぜたものとなっており、報告により異なっていることがあります。

## 校内研究会報告

サポート部

研究テーマ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けての取り組み

### 1 第1回校内研究会

(1) 日時 平成30年8月23日(木) 9:15~12:00

(2) 講師 大阪教育大学 井坂 行男 教授

(3) テーマ 聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学び

(4) 要約

前半は「主体的・対話的で深い学び」について、その概要や基礎的な理論面をわかりやすく講演していただいた。後半では、聴覚障がいのある幼児・児童・生徒に対する「主体的・対話的で深い学び」に焦点を絞り、他の聴覚支援学校での実践例なども交えながら紹介していただいた。

これまでに本校が培ってきた保育・教育実践を「主体的・対話的で深い学び」の観点から改めて振り返りながら、幼稚部・小学部・中学部・高等部教員、養護教諭、寄宿者職員の全員で整理できたことは非常に有益であった。

### 2 第2回校内研究会

(1) 日時 平成31年2月15日(金) 16:00~17:00

(2) 研究発表

① 幼稚部 子どもが主体的に遊び、学びに向かう力を育む保育づくり

発表者 土口 真奈

幼稚部では実際に行った保育の一場面について教員で協議しながら、幼稚部教員の保育力を向上させ質の高い保育を目指した。そのために、幼稚園教育要領・特別支援学校幼稚部指導要領の理解を進め、幼児教育や教育方針の共通理解を図った。

② 小学部 主体的・対話的で深い学びの実現 - 小学部での取り組み -

発表者 南 誠

発達段階や特性がそれぞれ異なる児童の実態を把握し、授業の中で一人ひとりの力を引き出す指導を実践することを目的に、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」について小学部の考えをまとめた。

※研究内容の詳細な報告は、各部報告にて掲載

# 子どもが主体的に遊び、学びに向かう力を育む保育づくり

幼稚園部

## 1 はじめに

平成30年4月に新幼稚園教育要領が施行された。今後の幼児教育において「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱を、幼児期に必要な遊びを通じた総合的な指導の中で、培っていかなければならない。

近年、幼稚園部では複数の障がいをもつ幼児、人工内耳を装着している幼児等、実態が多様化している。また教員の異動が頻繁化しており、保育の質の向上、教員の専門性の維持・向上も課題となっている。

そこで今年度は、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けての取り組み」という学校全体のテーマに沿ったうえで、幼稚園部においてどのような保育をめざすのかを教員間で共有し、実践につなげていけるように研究に取り組んだ。

## 2 研究の目的・計画

幼稚園教育要領（特別支援学校幼稚園部教育要領）や本校教育課程の観点を理解する



計画（1）幼稚園教育要領の観点について共通理解を行う。

計画（2）「主体的・対話的で深い学び」の観点について検討する。

幼児の見方を見直し、教育方針や指導の重点を共通理解する



計画（3）各学年の目標を設定する。

幼稚園部教員の保育力を向上させ『質の高い保育』をめざす

計画（4）研究保育を実施し、保育の課題について協議を行う。

計画（5）研究保育を実施し、「主体的・対話的」な保育について協議を行う。

## 3 研究内容

（1）幼稚園教育要領（特別支援学校幼稚園部教育要領）や本校教育課程の観点を理解し、幼児教育における「主体的・対話的で深い学び」の観点について検討した。

- ① 幼稚園教育要領（特別支援学校幼稚園部教育要領）のポイントについて資料をもとに共通理解を行った。（計画（1））

幼稚園教育要領改訂のポイント

- 幼稚園教育において育みたい資質・能力を明確化  
「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」
- 5歳児修了時までには育ってほしい具体的な姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確化するとともに、幼児教育と小学校教育との接続の一層の強化を図る
- 幼稚園教育における重要な学習としての遊びのなかで「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る

<国立教育政策研究所のシンポジウム資料より>

② 幼児教育における「主体的・対話的で深い学び」の観点について検討した。(計画(2))

主体的な学び	対話的な学び	深い学び
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが自ら活動に参加し、取り組もうとしているか</li> <li>・子どもが活動の流れを理解し、活動したことを振り返ることができているか</li> <li>・子どもが「わかった」「できた」「なるほど」と実感できているか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者とコミュニケーションをとることで、子どもが考え方の視野を広げることができているか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが「わかった」「できた」「なるほど」と実感できるために、教員が働きかけ、子どもが考えようとしているか</li> </ul>

(2) 幼児教育の観点を確認したうえで、各学年の子どもの課題を見直した。また各学年の実態を考慮し、教育方針を具体化するために目標を設定した。(計画(3))

- 早期教育相談** 幼児数：0歳児 14人 1歳児 9人 2歳児 14人 教員数：2人
- ・親子で楽しく集団あそびに取り組む
  - ・「人に伝えたい」「伝わって嬉しい」「どうやったら伝わるかな」と実感する
  - ・楽しい体験を通してことばを身につける

- 3歳児** 幼児数：6人 教員数：3人
- ・好きなものを見つける
  - ・物事を自分で選ぶことができる

- 4歳児** 幼児数：17人 教員数：7人
- ・ことばを知り、ことばを使って考える

- ・相手に伝わる喜び、理解できる楽しさを知る

5歳児 幼児数：8人 教員数：3人

- ・生活習慣の自立をめざす（自分でできることは自分でする）

※ 教員数には非常勤講師及び聴能担当は含めていない

- (3) 研究保育を実施し、保育についてグループにわかれて協議を行った。また協議した内容については、各グループが発表を行い、意見交換をした。そして研究のアドバイザーとして同志社大学 准教授 中瀬 浩一先生を招き、研究方法や協議内容について助言をいただいた。

(以下の表は概略である)

- ① 指導案を作成し、研究保育を実施した。それぞれの保育内容に応じて、テーマを設定し、グループ協議を行った。(計画(4))

ア 「新聞紙あそび」(早期教育相談)

幼児の活動	指導・支援	協議
○新聞紙あそびをする ・保護者や友だちと一緒に新聞紙をちぎり、かけ合って楽しむ	・親子で関わりながら遊ぶように促し、保護者には子どもに声をかけていくよう知らせる	・複数担任制を活かし、役割を共通理解したうえで分担する ・保護者が子どもと関わるように促し、教員が介入しすぎないようにする

イ 「表現あそび」(3歳児)

幼児の活動	指導・支援	協議
○絵本を見る ○登場する動物になる	・視覚的な手がかりを活用する ・どうやって表現するのか子どもたちに考えさせる	・日頃のコミュニケーションを繰り返す行うことで表現あそびが充実したものとなる

ウ 「おかえりの会」(4歳児)

幼児の活動	指導・支援	協議
○忘れ物の名称を思い出し、指文字で表す	・すぐに正解を与えず、共通の話題として子どもたちに投げかける	・親子での会話のきっかけとなるように、話の焦点をしばって保育を進める

エ 「しまおに(ルールのある遊び)」(4歳児)

幼児の活動	指導・支援	協議
○遊びのルールを知る ○簡単な質問に答える	・視覚的な手がかり(カード)を用いてルールを説明する ・子どもが活動に興味を持てるような質問をする	・教員が見本として示す方法もある ・ゲームに楽しく参加することを大切にしたい

オ「発音（クラス発音）」（4歳児）

幼児の活動	指導・支援	協議
○口形カードを見て母音の発音の練習をする	・幼児それぞれに正しい発音をするためのポイントを伝える	・学年担任が発音指導を知ること、子どもの実態把握と保育での活用につながる

カ「劇あそび」（5歳児）

幼児の活動	指導・支援	協議
○絵本を見ながら、動物の鳴き声を考える ○登場人物のセリフを考える	・子どもの発言や考えを認めることで主体的に参加できるようにする	・友だちと一緒に『世界・イメージ』を共有して遊ぶごっこあそびは、劇あそびに活かされる

- ② “主体的・対話的で深い学び”について焦点を当て指導案を作成し、研究保育を実施した。保育の中で“主体的・対話的”な場面について、グループ協議を行った。（計画（5））

ア「朝のあつまり」（早期教育相談）

幼児の活動	主体的・対話的な場面
○朝の挨拶をする ○お返事をする	・子どもが先生になりきることで、友だちの名前を呼ぶ活動ができた ・子どもが自主的に発言できる質問内容であった

イ「言語（自立活動）」（3歳児）

幼児の活動	主体的・対話的な場面
○乗りたい乗り物のカードを選んで、発表する ○地図上にカードを貼る	・教材が子どもたちの実態に合っているため積極的に取り組めた ・質問内容が明確であり、自己選択、自己表現につながった ・発言している友だちに注目し、お互いに意識し合っている様子が 見られる

ウ「朝のあつまり」（4歳児）

幼児の活動	主体的・対話的な場面
○日付の確認をする ○予定の確認をする	・視覚教材を使用することで、支援が必要な子どもも意見を言う ことができている ・日々の保育の積み重ねで、活動に取り組む姿勢ができている

エ「楽器あそび」(4歳児)

幼児の活動	主体的・対話的場面
○楽器の名前を確認する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの実態に合った発問だったため、発言することで達成感</li> <li>を味わっていた</li> <li>・視覚と聴覚を活用できる楽器あそびだった</li> </ul>
○リズム打ちをする	

オ

「製作」(5歳児)

幼児の活動	主体的・対話的な場面
○材料を選びながら作る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・材料や接着方法を選んだり考えたりできる環境を整えることで、試行錯誤しながら取り組んでいた</li> <li>・子ども同士で手伝ったり、声をかけあったりしていた</li> </ul>
○作品をみんなで見合う	

③ 指導助言

上記の協議について、指導助言をいただいた。

幼児教育において「主体的・対話的で深い学び」の視点で必要なことは

- ・子どもがどこを見ているのか、何を見ているのかキャッチする
- ・「視線を合わせる」ことにアンテナをはっておく
- ・教員の言葉かけ一つが、主体性を失わせてしまうこともあることを理解する
- ・子どものイメージに教員が寄り添う
- ・子どもの思考力、創造力を育むためには、教員は遠回りすることも必要
- ・発言を他者から認めてもらえる経験が大切
- ・注目すべきポイントを教員は考える必要がある

また教員自身が成長するためには、いろいろな人の実践を見聞きして、実際に取り組んでみるのが重要である。そして、他の教員の気づきを自分の気づきとして取り入れることに取り組んでほしい。そのためには、常日頃から教員間での意見の交流が必要である。

4 おわりに

今回の研究で幼児教育の基礎・基礎、様々な保育のねらいや目的、指導方法や課題について見直すことができた。そのことにより幼稚部における「主体的・対話的で深い学び」について理解を進めることにつながった。また子どもの実態や保護者の思いを把握することが、丁寧な指導・支援、対応につながっていくと改めて実感することができた。今回、幼稚部全体でグループ協議を行ったことで、“教員が主体的に保育を振り返り、他の教員からのアドバイスなども聞くことができた”という意見が挙げられた。子どもや保育について教員が気付いたことを情報交換し、取り入れることは保育の質の向上、また教員の専門性の維持と向上につながると考える。今後の課題として、教員間の情報交換をさらに積極的に行うことが必要である。また研究保育をこまめに実施し、そこで得られた成果を日々の実践の中で活かす機会を設定していきたい。

# 主体的・対話的で深い学びの実現～小学部での取り組み～

小学部

## 1 はじめに

今年度より学校全体でアクティブラーニングの観点を踏まえた「主体的・対話的で深い学びの実現」という、3つの大きな柱をもとに研究を進めた。

小学部においては、発達段階や特性が様々な児童の実態を把握し、授業の中で一人ひとりの力を引き出す指導を実践していくことが求められる。昨年度の反省として、児童が主体性をもって学習に取り組めるような指導が課題として残った。それを踏まえて、児童が意欲的・主体的に学ぼうとする気持ちを育てるために、小学部では授業の中で課題を達成する指導・支援を意識できる次の3つの観点を考えた。

●主体的な学びとは、授業者がすぐに答えを教えたり過度に介入したりせずに、児童自身が気付き、考え、発表するための場面設定をする。また、学ぶことに興味・関心を持ち発言や記述、成果物を作る活動を通し、自ら問題解決に向かうための学び。

■対話的な学びとは、話し合いや討論、グループ活動など、児童単独ではなく、他の児童や授業者と対話したり協働したりする活動を通して、自分の視野を広げていくための学び。

◆深い学びとは、今まで学習した内容や経験と関連づけてより深く理解したり、問題を自分で探し出し、解決方法を考えたりする、自分の思いや考えを基に、さらに高みを目指す学び。

この3つの観点をもとに授業を計画し展開することによって、児童が自分から意欲的・主体的に参加する学びが達成できるのではないかと考え、研究を進めた。

## 2 研究活動の概要

### (1) 研究グループの活動

小学部全員が3つの研究グループ（低学年・高学年・重複障がい教育）に分かれて研究活動を行った。各グループで研究授業を1回実施し、指導案の検討会と授業後の研究討議会を行った。昨年度より教育センターのパッケージ研修にて講師を招聘した。講師より、指導案の検討会、研究授業1週間前の授業参観、研究授業後の研究討議会の場で幅広い指導助言や講評を頂いた。各研究グループの活動については以下の通りである。

#### ア 研究グループ

グループ	学年、教科、単元名【教材名】 本時の目標	評価の観点 (◆■●は前述した観点を参照)
低学年	1年 国語 「ようすをおもいうかべながらよもう」 ・おばあちゃんに呼びかけ、お願いしたときのチロの様子を想像しながら読むことができる。	●登場人物の役になって音読している。 ■「こえがとんでった。」と思った時のチロの気持ちを吹き出しに書き、そう考えた理由をつけて発表している。 ■◆チロはどんな気持ちで耳をすましていたのか、動作化を通して考え、吹き出しに書いたものを友だちと共有している。

高学年	6年 算数 「速さ」 ・速さの考え方をを用いた解き方を理解し、相手に伝えることができる。	●山口先生（授業者）はライオンから逃げ切れるかを予想し、発表している。 ■ホワイトボードに書いた自分の考えを発表している。 ■友だちの考えをきいた上で、全体での話し合いをしている。
重複	なかよし活動 かいものしよう（なかよし遠足） 「買い物学習」 ・学校生活に必要なものを選ぶことができる。 ・買ったものを使い、買い物活動を振り返ることができる。	●友だちが買い物をしている様子を見ている。 ■悩んでいる時は、それぞれの品物の使い方をみている。 ●品物の中から自分で欲しいものを選んでいく。

## (2) 指導案と授業評価の充実

研究テーマを達成するために、指導案・指導略案の中に、主体的・対話的で深い学びの観点から授業の進め方について書く箇所を設けた。さらに、本時の展開の中に前述した3つの観点を記号（●■◆）として挿入することで、どの学習活動が3つの学びに結びつけることができるかをわかるようにし、参観者から見て指導者の授業に対する研究テーマの達成の方法が伝わるように工夫した。指導案の形式について、Aは学習グループ内で課題がほぼ共通する集団の研究授業に、Bは課題がそれぞれ異なる集団の研究授業の際に使用した。

また授業を参観するときは、本校小学部独自の評価基準となる「授業アドバイスシート」での3段階評価やコメントの記入、研究テーマを達成したかどうかの評価を行った。アドバイスシートも指導案と対比させてA、Bに分けた（資料1）。また研究討議会では、その評価を基に意見交換を行い、指導力の向上も図った。

## (3) 全教員による授業実践

今年度も昨年度と同様、小学部全教員が研究授業・公開授業のいずれかを行い、学部内参観することで小学部全体の指導力や研究テーマを踏まえた授業について研鑽できる体制を作った。

## (4) 学習会

小学部全員で行う学習会を1学期、3学期の全2回実施した。内容は次の通りである。

時 期	講 師	講 演 テ ー マ
1 学期	大阪府教育センター 支援教育推進室 高河原 健 主任指導主事 野村 佳津 指導主事	主体的・対話的で深い学びの実現
3 学期	本校小学部 清水 育代 教諭 第2学年担任	・KABC-II検査分析結果と実践報告 ・小学部 研究のまとめ

### (5) 若手教員の会

今年度も若手教員の会（新採用5年目以下の教員を対象）は3回の研修会を実施した。昨年度同様、参加者を3グループに分け、各研修会の企画、準備、運営、アンケート集計等をグループのメンバーで分担しながら進めた。第1回研修会は、「聴覚支援学校における外国語活動の指導について」をテーマに中学部の中島武史教諭を講師として迎え、講演をきいた後、小学部での外国語活動の取り組みについてグループワークを行った。アンケートの結果から、講師の先生からの話をきき、具体的な指導内容、教材について教えてもらい今後の参考になったという感想が多くあった。第2回研修会は、「ビジネスマナー」をテーマに小学部の堀谷留美教諭を講師として迎え、講演会を行った。ことば遣いやTPOを考えた服装、「ほうれんそう」など一般常識について改めて学ぶ機会となった。第3回研修会は、高等部の中村克己教諭から「高等部卒業後の進路を見据えた小学部での取り組み」について講演をきいた。本校高等部を卒業後の進路先について具体的に知ることができ、小学部6年間にどのような取り組みが必要なのかを学ぶことができた。

## 3 研究活動の成果と課題

### (1) 研究グループについて

各研究グループの児童の実態に合わせて、授業に主体的・対話的な活動を積極的に取り入れた。また、どうすれば深い学びにつながるかについて指導案検討会で意見を出し合い、研究授業を行った。低学年グループでは、小道具を使った劇化を通して、子どもたちの活動への意欲を高め、挿絵など視覚的な教材を駆使することで登場人物の心情を想像する手がかりとした。また、友だちの発表について、良いところを見つけたり、自身の発表につなげたりする様子が見られた。高学年グループでは、児童が興味を持って取り組めるような問題を設定することで、児童が自分でしっかりと考え、お互いの意見を共有する中で更に考えを深めることができた。重複障がいグループでは、見通しを持てるような視覚教材の工夫、実物を使った活動、TT同士の連携によって、児童が生き生きとした表情で活動に取り組む姿が見られた。また、友だちの発表を見て、自分の思いを表す児童もいた。

### (2) 指導技術の向上について

大阪府教育センターのパッケージ研修を利用し、学習会、指導案検討会、研究討議会といった場で講師から指導助言いただいた。その際に、学習指導要領に沿った指導案の書き方や授業の組み立て方など、改めて授業の基礎を深めることができた。また、主体的・対話的というのは、目新しい取り組みではなく、先生がこれまでやってきた指導であり、意識をすることが大事であることや、主体的・対話的について1つの授業内ではなく、1つの単元で達成できればいいこと、深い学びについてはその単元だけで達成するものではなく、日常生活でも活用できるようになると深い学びにつながるなどをご教授いただいた。

小学部全教員が研究授業・公開授業のいずれかを担当し、指導案・指導略案を書く過程の中で、研究テーマと単元との関わりについて記入することで、全員が主体的・対話的で深い学びの実現に向けて授業の検討および討議に取り組むことができた。また授業アドバイスシートを活用することで、参観の教員からの意見を授業者に戻元でき、自身の授業を見直すきっかけとなり、小学部教員全体で指導力を研鑽することができた。

### (3)今後に向けて

全校の研究テーマでもある「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けて、小学部では教員一人ひとりが指導力を研鑽する研究活動に取り組むことができた。特に一人一回研究・公開授業の実施は、今年度も引き続き取り組むことにし、一人ひとりが指導案・指導略案の作成に取り組んだ（一部の年次研修者は研究テーマに沿った内容でなくてもよい）。その結果、「主体的な学び」「対話的・協働的な学び」「深い学び」を実現するための指導事例を蓄積することができた。四月の当初は、上記の3つの学びをどう実現したらよいか具体的にイメージしにくいところがあったが、この1年間で事例を重ねることで、指導に対する具体的な見通しを持って取り組むことができたと考えている。例えば、児童に主体的に取り組ませるために、指導者による劇化、児童自身が教具を操作する活動を設けることで、見通しをもって授業に参加しようとする様子が見られた。また対話的な学びとして授業に参加させるために、ペアの話し合いから共通した考えを形成させたり、場に出た意見と自分の意見を比べたりすることで、自分以外の考えに触れて新しい意見を発表する場面も見られた。深い学びについては、主体的・対話的の学びとは異なり、教員一人ひとりの考える深い学びの指導の考え方が多様であるため、研究・公開授業の中では深い学びを実現するための様々な実践が挙げられた。深い学びの実践についても模索中ではあるが、大阪府教育センターの主任指導主事と指導主事から、学習場面で学んだことを生活場面へ応用していく指導を深い学びの実現と考えることができるというお話もあり、今後も引き続き検討を重ねていきたい。このように、3つの学びを実現できる具体的な学習場面の事例を蓄積することができ、同研究テーマを続けるにあたって、来年度の研究活動に大きく寄与する参考材料となりうると考えている。

また、今年度から新たに研究テーマを設定するにあたり、研究テーマとの関連性が見えてくるよう指導案・指導略案の見直しを行ったが、この様式についても課題が残った。「主体的な学び」「対話的・協働的な学び」「深い学び」を実現する指導がどこでなされるかを明らかにするために、●■◆のマークを挿入することで、本時の展開のどの学習活動に対応するかが分かる様式でスタートした。しかし、大阪府教育センターの主任指導主事と指導主事のお話の中で、3つの学びについては本時のみの中で実現されるものではなく、それを包括する単元全体を通して実現されるものという指摘があった。また様式には「研究テーマとのつながり」を明文化するための項目欄も設けているが、それは研究テーマと本時とのつながりを指すのかまたは単元全体のつながりを記述するのかが曖昧な面があり、指導案を通して授業者の意図が参観者に伝わったかどうかはまだ疑問が残る。そのため、本時の展開に限らず、単元全体でどのように3つの学びを実現していくかが分かるように手を加える必要がある。

また、上記の3つの学びが達成できたかどうかを考察する評価の仕方も検討の余地が残っている。従来から小学部では、研究・公開授業のときに指導案・略案と一緒に配付される「授業アドバイスシート」を使って授業評価をしているが、今年度の研究テーマの新設に伴い、これも研究テーマに合わせた評価項目へと更新した。アドバイスシートの新様式には、3つの学びのそれぞれに、3段階評価とコメントを書く欄を設け、参観者に3つの学びが達成できたかを評価してもらうようにした。こうした指導案・略案と授業アドバイスシートの組み合わせによる指導・評価一体型の授業評価は、一定の効果をあげ授業者に参観者からの評価をフィードバックし、他者の気づきから授業改善する機会を提供することができたと思われる。

る。しかし、その大多数が授業者の指導技術や言動に対する指摘や助言であり、研究テーマ自体を評価するものが少ないという印象が否めない。そのため、研究テーマを評価しやすいような評価規準の設定についても課題として残っている。また、大阪府教育センターの主任指導主事と指導主事が指摘するように3つの学びは必ずしも本時の中で達成されるものではなく、3つの学びを実現する単元全体の評価システムについても検討していく必要がある。その他、年度末に実施した小学部研究活動のアンケートの中で指摘があったように、増加する若手教員の育成方法、他の障がいと併せ有する児童の3つの学びを実現する指導について、授業計画段階における指導案の検討手順についてなど、運営の仕方から指導力向上の手法についてと様々な改善の余地がある。来年度も引き続き同研究テーマで取り組むにあたり、こうした意見を踏まえて小学部教員一人ひとりの指導力の研鑽に臨んでいきたい。

資料1 (A アドバイスシート)

大阪府立中央聴覚支援学校小学部 授業アドバイスシートA

- 年 - 月 - 日 /-/曜日 - 時間目 教科 ( - ) 授業者 ( )

評価は、◎…十分達成されている ○…概ね達成されている △…努力が必要 で記入してください。

項目	内容	評価	アドバイス (気づいたこと)
基礎的 授業に 環境 を整 備	1 児童は、授業の準備（教科書など）ができている。		
	2 安心して授業に集中できる雰囲気がある。		
	3 私語をしない・話をしている人の方を見るなどの学習規律が徹底している。		
	4 事故防止に努め、安全への配慮を行っている。		
	5 互いの顔が見えるような机の配置になっている。		
基礎的 な 指 導 技 術	1 指導案が適切に作成されている。		
	2 導入を工夫している。		
	3 めあて（目標）を提示している。		
	4 時間配分がうまくできている。		
	5 話す速さが適切である。		
	6 明確でわかりやすい指示や説明をしている。		
	7 児童に顔や口が見えるように注意している。		
	8 児童に伝わりやすい方法（手話、指文字、音声など）で表現している。		
	9 板書をわかりやすく工夫している。		
	10 考えを発表したり書いたりする場面を設定している。		
	11 児童の発表や説明を尊重して授業を行っている。		
	12 教材やワークシートを適切に活用している。		
	13 児童の実態に合わせて指導助言を行うなど、適切な対応をしている。		
	14 適切に授業のまとめをしている。		
テ ー マ と の 関 わ り	● 「主体的な学び」が実現できている。		
	■ 「対話的・協働的な学び」が実現できている。		
	◆ 「深い学び」が実現できている。		
その他			

記入者 ( )

資料1 (B アドバイスシート)

大阪府立中央聴覚支援学校小学部 授業アドバイスシートB

- 年 - 月 - 日 / - / - 曜日 - 時間目 教科 ( - ) 授業者 ( )

評価は、◎…十分達成されている ○…概ね達成されている △…努力が必要 で記入してください。

項目	内容	評価	アドバイス (気づいたこと)
基礎的 授業に おける 環境 整備	1 授業の準備の方法を分かりやすく提示している。		
	2 安心して授業に集中ができる雰囲気がある。		
	3 事故防止に努め、安全への配慮を行っている。		
	4 指導内容に合った教室内配置になっている。		
基礎的 な 指導 技術	1 指導案が適切に作成されている。		
	2 授業の流れ (見通し) がわかりやすい工夫をしている。		
	3 導入を工夫している。		
	4 めあて (目標) を設定し、提示している。		
	5 時間配分がうまくできている。		
	6 子ども自身が活躍する機会を作っている。		
	7 話す速さが適切である。		
	8 明確でわかりやすい指示や説明をしている。		
	9 児童に顔や口が見えるように注意している。		
	10 児童に伝わりやすい方法 (手話、指文字、音声など) で表現している。		
	11 板書や掲示物をわかりやすく活用し、工夫している。		
	12 児童の発表を尊重して授業を行っている。		
	13 T T (ティームティーチング) を適切に活用している。 (※1)		
	14 児童の実態に合わせて指導助言を行うなど、適切な対応をしている。		
	15 適切に授業のまとめをしている。		
テ ー マ と の 関 わ り	● 「主体的な学び」が実現できている。		
	■ 「対話的・協働的な学び」が実現できている。		
	◆ 「深い学び」が実現できている。		
その他			

※1 T T (ティームティーチング) …授業全体を指導する主担の指導のもと、他の教員が協力・連携してその授業の補助をすること

記入者 ( )

# 中学部の生徒にとっての主体的・対話的で深い学びとは

中学部

はじめに

平成28年度、29年度の中学部研究では、授業やそれ以外の学校場面全般で、中学部の生徒たちにとってより分かりやすいコミュニケーション方法やコミュニケーション環境にはどんなものがあるのかを調べた。そして、より分かりやすいコミュニケーション方法等の実践を中学部の生徒たちへの合理的配慮のひとつとして位置づけた。

今年度は「主体的・対話的で深い学びの実現に向けての取り組み」を全校テーマに、来年度にわたる2年計画での研究が全校で進められている。それを受けて、中学部では実際に在籍する生徒を念頭に「中学部の生徒にとっての主体的・対話的で深い学びとは」何なのかを考え、中学部教員の意見を記録していく取り組みを今年度の研究として行い、来年度以降の研究につなげることにした。

## 1 研究の目的

今年度の中学部研究では、中学部に在籍している生徒たちが主体的・対話的で深い学びを実現していくために、このテーマについての研修受講を通して学習しながら、中学部教員のもつアイデアを具体化しまとめていく作業を第一の目的にしている。最終的には、「主体的・対話的で深い学び」が聴覚支援学校においてどのように達成可能なのかを探っていききたい。

## 2 研究方法

中学部教員が「主体的・対話的で深い学び」についての研修会と研究会に参加し学習を進めた。研修内容は、一般的な理論面に加えて、聴覚障がいのある生徒を対象とした「主体的・対話的で深い学び」研修や、実際の授業ビデオを見ながらの振り返りと授業例の紹介を含む実践的な研修を準備した。

今年度に受けた研修、開催した研究会のテーマや日時は次のとおりである。

第一回校内研究会： 8月23日 木曜日

「聴覚支援学校における主体的・対話的で深い学び」

井坂行男 先生（大阪教育大学教授）

中・高教職員研修会： 12月21日 金曜日

「主体的・対話的で深い学びのある授業をつくるためには」

原雅史 先生（大阪市立三国小学校長）

第二回校内研究会： 2月15日 金曜日

幼稚部「子どもが主体的に遊び、学びに向かう力を育む保育づくり」

小学部「主体的・対話的で深い学びの実現 - 小学部での取り組み -」

これら研修・研究会での学習とは別に、中学部教員を対象にアンケート調査を行った。アンケートは「主体的・対話的で深い学び」に関する内容で、質問の詳細は表1の通りである。中学部には社会的自立のための学習を重視する1組と、準ずる課程に対応して学習が進む2組がある。「主体的・対話的で深い学び」のテーマはどちらの生徒たちにとっても同じように重要であるが、求められる内容や方法には違いがあると予想されるため、質問への回答は1組と2組に分けて求めることにした。

表1 質問項目の詳細

①	生徒が「主体的・対話的」に参加する授業を作るためには、どのような工夫が必要でしょうか？
②	転任者や、まだ手話が得意ではない教員が、(生徒と授業者教員との)「対話的」な授業場面を作り出すには、どのような方法が考えられますか？
③	「深い学び」とは、生徒がどのような状態に到達することだと思いますか？

### 3 結果と考察

アンケート調査からは、中学部教員の考える「主体的・対話的で深い学び」が多岐にわたっていることが示唆された。以下に、それぞれの質問に対する代表的な回答を記載するとともに若干の考察を加える。

質問① 生徒が「主体的・対話的」に参加する授業を作るためには、どのような工夫が必要でしょうか？について

主体的	1・2組 共通	<ul style="list-style-type: none"> <li>・少し難しい課題を設定する。</li> <li>・簡単な課題だけでなく難しい魅力のある課題を用意する。</li> </ul>
	1組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・興味をもてるような視覚的で楽しい教材を使う。</li> <li>・生徒からのことばの意図をくみとる。</li> <li>・伝えたいことが伝わった経験を積ませる。</li> <li>・自分で考えて、体を動かす。</li> <li>・興味をもって取り組めるための導入。</li> <li>・あいさつから担当生徒を決め、自分たちでやるという意識を作る。</li> <li>・課題を与え、自分で考えさせる。</li> </ul>
	2組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワークの活用。</li> <li>・考えさせる発問の活用。</li> <li>・授業の「ねらい」に生徒が近づいていくことができるよう、よく練った質問を準備する。</li> <li>・自らの考えを伝える力を育てるために、授業内で小さなステップを作っていく工夫。</li> <li>・積極的に参加でき、記録向上などに意欲的になれる教材の選択や声かけの工夫。</li> <li>・対教師、生徒間での対話を通し、意見の違いや話し方等を学ぶことができるための工夫。</li> <li>・自分の意見を発表できる授業作り。</li> <li>・自分から進んで勉強していけるような授業計画作り。</li> <li>・反転学習を活用し、自ら予習したくなるようにさせる工夫。</li> </ul>
対話的	1・2組 共通	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒同士話し合っって考えられるように発問する。</li> <li>・どの生徒も発表できるような設問を作る。</li> </ul>
	1組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他生徒と協力して作業できる教材を作る。</li> <li>・席の配置を工夫して対話しやすい環境を作る。</li> <li>・他者の意見を知る、聞くためのサポートを行う。</li> <li>・チームを作る時など、自分たちで相談し決めるように促す。</li> <li>・教師が生徒の考えや出来事を引き出す工夫。</li> <li>・選択肢のある質問を用いて、生徒が「答えることができる」という経験から始められる工夫。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちと考えを共有することを大切にさせるための工夫。</li> </ul>
2組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワークの活用。</li> <li>・発表のしやすいクラス環境を作る。</li> <li>・教師が話しすぎないようにする。</li> <li>・他者の意見の要点を理解できるようにサポートする。</li> <li>・記録向上や、良い演技を作るためにお互いにアドバイスしあえるように授業をデザインする工夫。</li> <li>・意見を出し合うディスカッション式の授業作り。</li> <li>・生徒同士で登場人物の気持ちを想像させる工夫。</li> <li>・選択肢のある質問だけでなく、自分で考えて答えることが必要な質問を準備する。</li> <li>・予習した内容から課題に取り組むことができる授業作り。</li> </ul>

「主体的」に参加するための工夫の中で1・2組に共通して言及されていることは、簡単な設問だけでなく難しい問題を活用することであった。他の回答からも分かるように、「主体的」とは自ら考える・考えようとする意欲に関係するため、生徒が少し立ち止まってじっくりと考える場面の設定が大切になってくると思われる。

「対話的」に参加するという観点では、生徒たちが話し合う場面の設定が重視されている。そのためにディスカッションや発表、グループワークのようなしかけの活用が想定されている。また、対話がしやすい座席配置のように教室環境の整備も必要である。

質問② 新転任者や、まだ手話が得意ではない教員が、(生徒と授業者教員との)「対話的」な授業場面を作り出すには、どのような方法が考えられますか?について

1・2組 共通	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手話に頼りすぎず、コミュニケーション方法はたくさんあることを忘れずに生徒に接する。</li> <li>・ICT 機器を使うこと。</li> <li>・視覚的教材を多く活用すること。</li> </ul>
1組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノンバーバルな表現、身振り手振りで生徒とやり取りをすることから始める。</li> <li>・笑顔、雰囲気、見てわかる物を活用しながら生徒の理解を進めていく。</li> <li>・動画や写真を活用し、生徒たちの発表しようとする気持ちを引き出す工夫。</li> <li>・生徒と一緒に楽しむことを大事にする。</li> </ul>
2組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒板やディスプレイ、パソコンなどを活用して、生徒の関心をひくことから始めるようにする。</li> <li>・姿勢、見本(デモンストレーション)、ビデオ、ホワイトボードの活用。</li> </ul>

手話を習得中の新転任教員にとって、対話的な授業場面を作ることは簡単ではないと予想される。ここでの回答にあるように、手話に代わる何らかの視覚的な情報伝達手段の活用が「対話」を補助すると考えられる。また、生徒と一緒に授業を楽しもうという教員の姿勢が生徒との対話を活性化させる側面もある。

質問③ 「深い学び」とは、生徒がどのような状態に到達することだと思いますか?について

1・2組 共通	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒自身が納得・理解している状態。分かるよりも「納得」という実感。</li> <li>・表面的な知識が実感として分かる状態。</li> <li>・学んだことを日々の生活や、これからの人生に活かすことができるものとして身につけている状態。</li> </ul>
1組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマをしっかり身につけて、いつでも使うことができる状態。</li> <li>・実生活の中で生かされたとき。</li> <li>・「できた」、「楽しかった」という経験をつんだ状態。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が授業に前のめりになる状態。</li> <li>・日常生活に結びつけて知識を使えること。</li> <li>・夢中になって作っている状態。</li> </ul>
2組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知識が定着して、自由に使える状態。</li> <li>・授業内容を人に教えることができたとき。</li> <li>・授業内容を自分で説明できたとき。</li> <li>・他教科とも結びつけて知識を使える状態。</li> <li>・自らの成功体験として生活に生きる状態。</li> <li>・生徒がアウトプットできる状態。</li> <li>・生徒自身が授業内容を他の生徒に説明できるくらい理解できている状態。</li> <li>・自分で考えて、課題に取り組むことができる状態。</li> <li>・他の人の考えに気づくことができる状態。</li> <li>・体育を通して仲間と協力することや、自分自身の成長を感じられた状態。</li> </ul>

ここでの回答から、中学部教員がイメージする「深い学び」とは、学習したことや知識を実際の生活で活かすことができる・使うことができる状態だと言える。また、その一つ前段階として、授業内容が説明できることや、他の人に教えられることも「深い学び」の目安となっている。

#### 4 まとめと今後の課題

今年度の研究では、「主体的・対話的で深い学び」に関する中学部教員の考えを記録しまとめた。「主体的」な授業作りの達成には、少し難しい設問を使うことで生徒に考えさせる時間を作ること、生徒が考えたいような発問の準備、が大事にされている。「対話的」では、生徒同士の話し合い場面の設定が重要視されており、そのためにグループワークなどの活用が求められている。手話を学習段階にある新転任教員が「対話的」に授業を進めるための方策としては、ICTなどの視覚的手段を代用することが考えられる。最後に、「深い学び」の達成には、授業で学んだ知識を実際の生活で使えることが大事だと考えられている。したがって、授業では、理解した事柄を他の人に伝えることや説明できることが「深い学び」の目安として期待されている。

今後の課題は、今回の研究でまとめた「主体的・対話的で深い学び」についての中学部教員の考えを実践に活かし、聴覚支援学校における「主体的・対話的で深い学び」を実現していくことである。そのために、ここでの結果を来年度迎える新転任者用の資料として活用することが、実践可能なひとつの方策として考えられる。

# 高等部の研究活動について

高等部

## 1. 【「アクティブ・ラーニング」の視点を取り入れた教科指導について：社会科】

### 1 はじめに

平成 28 年 6 月の公職選挙法改正にもとづき、選挙権年齢が引き下げられ、高等部では本科 3 年生の一部の生徒と専攻科の生徒が選挙権を有することとなった。高等学校公民科の新学習指導要領では、「選挙権年齢及び成年年齢が 18 歳に引き下げられ、生徒にとって政治や社会が一層身近なものとなる中、高等学校においては、生徒一人ひとりに社会で求められる資質・能力を育み、生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出していくことが、これまで以上に重要となっている」との記載があり、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進を進めている。高等部社会科では、自立活動と授業連携を行い、政治的教養を育む授業実践として、『高等部をより良くするために』というテーマで、KJ法を取り入れた教科指導に取り組んだ。

### 2 授業の流れ

#### (1) 授業の意義について

授業の導入では視覚教材 (PowerPoint) を活用し、選挙権年齢の引き下げの理由や政治のしくみ、政党の役割などを生徒の発言を引き出しながら説明した。また、選挙の意義や、政治的無関心の増大がもつ危険性についても触れた。そのうえで、今回の授業をきっかけに、現代社会の諸課題についても、主体的に考察する大切さを学んでほしいという意図を伝えた。



#### (2) 「アクティブ・ラーニング」の視点を取り入れた授業実践

今回の授業ではKJ法を用いて実施した。KJ法とは、川喜田二郎氏が考案した手法で、収集した多量の情報をカード化し、同系統のものでグループ化することによって効率よく情報の整理と分析を行う方法である。

##### ①ブレインストーミング

まず最初に、「高等部での生活で困っていることや改善してほしいこと」、「良い取り組みだから続けたいこと」など、様々な意見を一人ひとりが付箋にたくさん書いていく。自由な発想で、枚数制限なく書くことにより、次の段階でより多くの視点で課題について考察することができる。



##### ②分類

次に、たくさん書いた付箋の中で内容が似ているもの、同じカテゴリーに属すると思われるものをグループ化していく。このとき教員は見守り、生徒たちが主体的に、意見を交換したり、相談したりしながらグループ分けをする。

##### ③見出しをつける

グループ化した後、それぞれのグループに見出しをつけていく。生徒たちは「雨漏りしているところがある」「エレベーターがない」などは『学校設備』、「制服を変えたい」「休み時間にもスマホを使いたい」などは『学校のルール』という



ように、見出しを考えた。

#### ④分類を視覚化

見出しをつけた付箋群は、関連性のあるグループ同士を近くに並べて模造紙に貼り、見出しを書き込む。線で囲んだり、矢印でグループ同士の関係性を示したりする。生徒たちは、「改善できそうなグループ」、「金銭面などの理由で生徒の力では改善できないグループ」などに分けていた。

#### ⑤文章化

最後に、それぞれのグループの付箋に書かれている言葉を使いながら、グループごとに文章化していく。グループ同士の関連性についても触れながら文章にまとめていく。今回は残念ながら時間が足りず、文章化する段階まで進めなかった。



### 3 成果と課題

今回の授業実践を通して、普段の授業では自分の考察に自信が持てず発言が控えめだったり、積極的に意見を言えなかったりする生徒が、自分の意見をたくさん付箋に書き出し、グループ分けの作業にも積極的に取り組む姿が見られた。また、普段から発言の多い生徒については、グループ化し、視覚化していく作業を通して、他の生徒の意見に同意したり、落ち着いて相手の説明を聞いたり（見たり）する態度が見られた。生徒同士で考えてもわからないときは、教員の助言を手がかりに考察する様子もたくさん見られた。

今後の課題は、通常の社会科の授業の中でどのように、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進を図っていくかである。アクティブ・ラーニングの視点は、特定の学習・指導の型や方法ではなく、習得・活用・探求の学習過程全体を見通した授業改善の視点であることを念頭に教科指導をしていくことが求められる。今回のKJ法を用いた授業で得たことをもとに、生徒が学ぶことに興味や関心を持ち、生徒同士の協働や教員との対話を手がかりに自己の考えを深める授業を実践できるよう教科指導の研鑽に努めていきたい。

## Ⅱ. 【「アクティブ・ラーニング」の視点を取り入れた教科指導について：インテリア科】

### 1 はじめに

平成30年8月30日大阪府高等学校教育課程説明会工業部会が開かれ、2022年度から施行する新学習指導要領工業科のポイントについて説明があった。現行学習指導要領の課題として、(1) 科学技術の進展等に伴い、必要とされる専門的な知識・技術も変化するとともに高度化、(2) 専門的な知識・技術の定着を図るとともに、多様な課題に対応できる課題解決能力を育成、(3) 産業現場等における長期間の実習等の実践的な学習活動をより一層充実、の3点が挙げられている。これらの課題を踏まえ産業界で必要とされる資質・能力を整理し、工業科の目標を「三つの柱」として設定。①知識及び技術、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等である。これらの指導に従い本校インテリア科において今年度実施・計画した内容について報告する。

### 2 授業の流れ

#### (1) 授業計画

今年度の課題は「大型ショッピングモールに自分の店舗を出店する」という内容である。本科インテリア科3年生のインテリア製図は1年次、2年次で学んだことを応用し、自身の発想を加えた知識・技術を発表する集大成の授業プログラムである。特に今年度は、今までにないICTを中心とした技法を用いて取り組んだ。通年でひとつの課題に取り組むため、具体的な準備・説明をし、期間目標を伝えることで、生徒自らが主体的に自己の能力と課題に向き合う時間の調整を行う。これは将来、就職したときに必ず必要な力であり、高等部ならではの近い将来を想定した「アクティブ・ラーニング」であると考えている。

## (2) 授業実践

生徒自らがプロデュースする店舗を立案、設計しプレゼンテーションを行う課題を設定した。今回は実現しないが、与えられた依頼（条件）という環境の中で自らのデザインを提案する。これは将来の生活につながる課題であると考える。

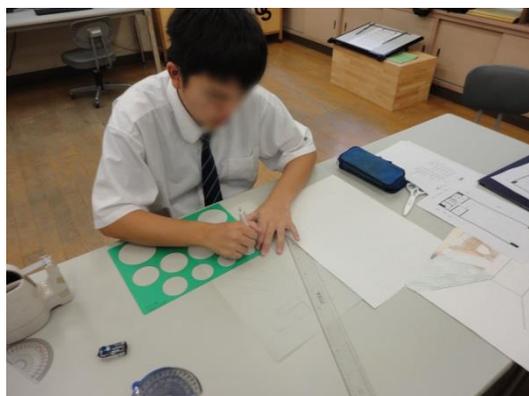
### ア プランニング（1学期）

物を設計する中で一番重要な工程である。現代社会におけるショッピングモールの店舗の需要・必要性から深く考察し、自身のオリジナリティを融合した店舗をプランニングする。インターネット検索や自らで見学するなど、情報収集から立案まで全てを行う。そして考えをまとめたプランを授業内で発表し、また他の生徒の発表をきいて対話することにより、客観的視点を養う。



### イ 製図（2学期）

JWWCADというフリーCADソフトを用い、各自プランニングした店舗を図面に起こしていく。技法は1・2年次で学んでおり、自らの知識・能力のみで平面図を引く。平面図完成後、内観パースを起こす技法を新たに学ぶ。教員指導のもと、新たな技法を身につけ自分のプランをよりよいものとして実現化していく。



### ウ プレゼンボード（3学期）

AdobeのIllustratorというソフトを用い、自ら構想した店舗を1枚のボードに表現する。1学期・2学期で作上げたものをPCに取り込み、自身のイメージに近いプレゼンボードを作成することにより、店舗の意義、雰囲気、情報を誰もが知ることができる。



### 3 まとめ

本授業は2月の作品展においてプレゼンテーションを行うことが最終目標である。自身のプランを多数の人々に伝え、理解してもらった経験は大学進学や就職後に必ず役立つものである。今回の課題では、自分で情報集約・統括することによって、自ら学びへの興味・関心を持ち見通しをもった学び、知識・技能の向上、プレゼンテーションと、主体的・対話的な深い学びのひとつの事例となったと考える。アクティブ・ラーニングの視点は正にインテリア科の授業に必要不可欠であり、インテリア科として今後も授業改善に努めていきたい。

# 「伝えたい」思いがふくらむ実践とは

## ～寄宿舎での研修を通じて探る～

寄宿舎 研修担当

### 1 はじめに

寄宿舎のキャッチフレーズは「豊かな心 育む寄宿舎」、教育目標を「豊かな心をはぐくみ、たくましく生きる力を育てる」としています。今年度の全校研究テーマ「主体的・対話的で深い学びの実践にむけての取り組み」に照らし合わせて、寄宿舎の研修テーマを『「伝えたい」思いがふくらむ実践 ～自ら考える生活づくりとは～』と考えてすすめてきました。舎生にとっての寄宿舎生活が主体的・対話的になっているか。そのために、私たちは子どもたちとどう向き合っているのか。今年度の研修テーマ『「伝えたい」思いがふくらむ実践』について、研修を通じてとりくんできたことをまとめました。

### 2 研修で大切にしていること

ここ数年、寄宿舎の研修は「グループ討議」と「事例検討」を中心に取り組んでいます。グループ討議では内容を確認した後、グループに分かれて討議を行っています。大人数だと全員が発言するのは難しいという理由で、小集団のグループにすることで密に話しができることを大切にしてきました。さらに受動的でなく、それぞれが主体的に関われるように事前に設問に答えてもらい、その内容で討議できるようにするなど工夫してきました。また、それぞれが別の機関で受けてきた研修内容について、寄宿舎内で共有・活用できるよう報告会も設けました。

### 3 研修計画

#### 【1学期】

研修会議	5月 2日	年間計画・研修テーマ
グループ討議①	5月18日	「卒業後の生活を見据えた寄宿舎の役割とは」
事例検討会①	7月27日	外部講師を助言者に迎えての事例検討（A・B）

#### 【2学期】

グループ討議②	9月12日	「研修報告を受けて」
グループ討議③	11月22日	「全校研修テーマ・寄宿舎研修テーマの沿った実践について」

#### 【3学期】

事例検討会②	3月 8日	外部講師を助言者に迎えての事例検討（A・Bその後）
研修総括	3月20日	研修内容の総括

### 4 研修を通じて

#### (1) グループ討議（年間3回）

討議するテーマを決めて、小集団で話し合い全体に報告をしています。年間を通じて同じグループで司会・記録・報告の役割を決めながら進めています。誰しものが発言でき、日頃感じていることを出し合い、深めていくことを大切にしています。

#### ア 卒業後の子どもたちの姿から、実践を振り返る（5月18日）

今回は数年の卒業生の進路や継続就労できているかなどを見ながら、高等部3年時の入舎形態についての振り返りを行いました。その中で二人の事例をもとに、次の3つの視点で討議

しました。

- ① 卒業後の生活を見据えた寄宿舎の役割とは
- ② 2つの事例から考えられること
- ③ 今後の入舎形態（寄宿舎での生活、役割）をどう考えるか

各グループでの討議では、卒業生には一日一日を充実させたいという思いの中、卒業後を見据えて本当の力はコミュニケーション力で人との関わりでトラブルが起こった時に解決できることが大切であると意見が出ました。また、舎生がなぜ入舎しているかを理論的に理解することも私たちにとって必要なことなのではと提起がありました。また、舎生の生活を考えるうえでこれらのことを学部担任とも共有できていることが大切であると確認しました。

#### イ 研修の報告（9月12日）

外部で行われた研修会への参加者から次の内容での報告があり、その報告内容をもとに各グループで「研修」について討議を深めました。

特別支援学校寄宿舎指導実践協議会の「安心・安全な寄宿舎指導の在り方 ～熊本地震から学ぶこと～」の熊本県立豊学校の講演については、実際に被災した学校から具体的な避難方法や課題についてアドバイスがあったことが報告され、今後寄宿舎でも活用できるのがありました。本校がSPS認証校になったこともあり、寄宿舎でも安心・安全の生活を考えるうえで別の機関で受けた研修内容の共有はとても意義あるものになりました。

- ① 近畿豊教育研究会 寄宿舎研究会
- ② 平成30年度 特別支援学校寄宿舎指導実践協議会
- ③ 近畿豊教育研究会 基本問題研究大会
- ④ その他 民間の研究会での研修・分科会・講演会

その後のアンケートでは、限られた時間での報告だったため、時間の確保が必要という意見も多く、研修のあり方も課題となりました。

また、報告後のグループ討議では「研修報告を受けて」という大まかなテーマ設定だったため、グループによってはどのように討議するかがまとまらなかったり、ひとつの報告内容に絞って討議したり、もっと今年度の研修テーマに沿って討議できるような設定が必要だったと反省点もあげられました。報告者からも研修テーマに沿った報告の視点が必要だったという意見もあり、次の研修への課題となりました。

#### ウ テーマに沿っての事例（11月22日）

前回の課題を受けて、第3回のグループ討議は全校研究テーマ「主体的・対話的で深い学びの実践に向けての取り組み」と寄宿舎研修テーマ「伝えたい」思いがふくらむ実践 ～自ら考える生活づくりとは～の二つの柱で討議することになりました。

私たちがこのテーマに沿った実践ができているか。その事例を挙げ、とりくみの中での変化もあわせて報告することにしました。また、事前に雛形に入力してもらい、全員が報告できるように取り組みました。文章だけでは十分に分からない内容も報告を聞き、討議することで理解ができたこともたくさんありました。生活の中でのなにげない子どもの様子を共有できる貴重な時間となりました。

#### (2) 事例検討会（年間2回）

これまでの事例検討会では寄宿舎職員だけでなく、事例にあげている担任の先生や助言者に管理職の参加が進めてきています。今年度は私たちの事例検討の視点に外から見た視点も加えたいということで、外部講師が呼べるよう企画しました。

第1回目は、元本校小学部教諭で支援センター長を務めた岡田直美氏（生野聴覚支援学校）

を招いて、「寄宿舎の先生方にお伝えしたいこと ～自分の実践を振り返って 事例検討会を前にして～」の講演と事例報告の後に助言もいただきました。

#### ア 寄宿舎生活の良さとは

岡田氏は2校続けて寄宿舎のある学校に勤務していたこともあり、現任校は「寄宿舎がなくて寂しい」と語られました。学部から見た寄宿舎についてたくさんあげられました。

- ・不登校になっている子が通学できて、学習保障ができる
- ・生活習慣が身につく
- ・保護者が他の兄弟に関わることができる、ほっとできる（レスパイトケア）
- ・話ができる集団がある（デフコミュニティ）
- ・放課後が充実（あそび・買い物・自治活動・話し合い）
- ・縦割り集団の中で先輩へのあこがれがもてたり、自分を律することができる（ロールモデルとなる存在）
- ・学校では見せない生活での顔を担任と共有できる

私たちが大切に考えてきたことでもあり、そのことが学部の先生と共有できていたということはいくらも実践の確信につながりました。

#### イ 「伝えたい」 思いを育てる

講演の中ではこれまで寄宿舎に在籍していた卒業生、在校生にも触れられていました。寄宿舎の研修にテーマにもある「伝えたい」思いがふくらむ実践にかかわって、聴能の「伝える」授業や「伝えたい」思いについて報告がありました。そのなかで“主体的に生きる”という意味では、何かを経験したら「伝えたい」と思える。何の経験もないとその思いはもてない。また、相手にわかってもらえた経験があつて、話のキャッチボールが楽しいと思えたことで「伝えたい！！」気持ちももてると語られました。寄宿舎では週明けの月曜日や長期休み明けの始業式の日の泊まりは「ただいま！！」と帰ってきた瞬間からおしゃべりが始まります。家庭や学校での出来事、興味関心のあること、友だちとのことなど、伝えたいことはたくさんあります。他愛もないおしゃべりを楽しめる経験は話し合いで自分の意見を言うこと、トラブルが起こった時に自分の気持ちを伝えることにもつながっていきます。時には伝え合う場を設け、また日々の生活のなかで「伝えたい」気持ちをふくらませ、発信できる力を育む実践について交流することができました。

#### ウ 自発的な行動・発言をうながすために

寄宿舎からは興味関心の対象を広げる働きかけをしてきた中学生Aさんとやる気はあるけれど伝えたい気持ちと言葉のマッチングが課題の高校生Bくんの二人の事例報告がありました。Aさんは興味のあることは「なぜ？」「どうして？」と質問し、積極的に知ろうとする行動が見られましたが、その対象を広げることが課題でした。生活の様々な場面での声かけやあまり関心のなかった話し合いの内容を丁寧に伝えていくことで、Aさんの生活の中での出来事と話されている内容がマッチして「そういうことか！」「先生聞いて！」と変化していきました。Bくんは「僕がやる！」と積極的に関わろうとするけれど、語彙の少なさから上手く表現できず、すねたり無視したりすることが見られました。その都度、理由を聞き取り、その時の気持ちを表す方法を伝えていき、自治会でサークル活動の予定を報告する場を設けるなど、「みんなに伝わった！」「わかってもらえた」という経験を積み重ねる中で自信をつけていきました。

意見交流の中では、「主体的にと言いつつ、子どもたちが職員の作った司会原稿を読むというのはいかが。もっと子どもたちの自主性に任せて、すすめていってもいいのではないか。」という意見もあり、そのことについては、原稿があることを心の支えに司会が出来たことが自信につながり、「次もやりたい！！」という気持ちももてる。そのことを繰り返したりくむこ

とで到達点に向かうことができるのではないかという意見も出されました。また、ローマ字の理解が難しい子が「将来、パソコンの仕事がしたい!」と語る時に“それは難しいのでは…”と思うのでなく、夢を持つことの意義や「〇〇したい!」というあこがれが力になる。その力をどうつけていくかは、職員の創意・工夫が必要という課題も出されました。職員全体でもっと討議を深めたい内容もあったので、今後も“自分たちの実践をどう考えていくのか”というテーマの中で意見を交流し合える場を設定していきたいと思いました。

最後のまとめでは岡田氏より、子どもが理解するためには様々な提示の仕方や伝え方がある。子どもがイライラしている時は分かろうとしているからであり、こちらの提案がうまくできていないと反省も必要である。そのためには事後の指導だけでなく、より丁寧な事前指導が必要である。特にきこえない子どもたちには繰り返しの経験が重要であると助言がありました。「ひとりの子どもにいろいろな先生が関わる。チーム寄宿舎でいいと思う」と語られ、それぞれの職員が自分の実践を問い直すきっかけとなった研修会でした。

2回目の事例検討会はAさん、Bくんのその後をまとめ、成長と課題を意見交流する予定です。今回も寄宿舎職員だけでなく、担任など校内の教員の参加も含め、協働で実践交流できるようすすめています。

## 5 おわりに

これまで研修を通じて、舎生の寄宿舎生活が主体的・対話的になるための実践を探ってきました。「伝えたい」思いがふくらむように、そのためには「伝えたい」と思える経験をたくさんできることが必要です。“どのような生活・とりくみを通じてその経験ができるのか”は、日々の引継ぎやパート会、部会でも話されていますが、寄宿舎での研修を通じて、より深めていける場と考えています。舎生に主体的・対話的にと願うように私たち自身が主体的に実践にとりくめているかは問い続けていきたいと考えています。

舎生が「伝えたい」と自ら発信していく、コミュニケーション力をつけていく生活づくりができるよう、私たちの実践について討議・学習できる研修を今後もすすめていきたいと思います。

【第 52 回全日本聾教育研究大会（北海道大会）】

聴覚支援学校における合理的配慮の視点を導入した授業づくり

～大阪府立中央聴覚支援学校小学部の取り組み～

第 13 分科会

大阪府立中央聴覚支援学校 山口 亜希子

【概要】小学部では、平成 29 年度に「自ら学ぼうとする子どもを育てるための合理的配慮とは」という研究テーマを設定し、三つの合理的配慮の視点から学部全体で指導力の向上と研究の充実に取り組んだ。その取り組みについて報告する。

【キーワード】 合理的配慮 小学部 指導力の向上

1 はじめに

本校は平成 28・29 年度に学校全体で「聴覚支援学校の『合理的配慮』とは～学校生活の中で必要な合理的配慮とはなにか～」というテーマで研究に取り組んできた。

小学部の課題として、児童が学習課題に取り組む場で教員が時に答えを与えすぎてしまい、児童が自ら考えて学ぼうとする機会が失われることが挙げられた。そのため、29 年度に「自ら学ぼうとする子どもを育てるための合理的配慮とは」を研究テーマに、児童が自分から意欲的、主体的に学ぼうとする力を育てることをめざした。また、集団の中で児童一人ひとりのニーズをとらえていくという合理的配慮の視点を踏まえるために、発達段階や様々な特性の児童の実態を把握する。そして、授業の中で個々の力を引き出す指導を実践しながら児童が自分で考えて問題解決につなげていく力を育てることも追究することにした。このように個別の実態を踏まえた上で、後述する合理的配慮の視点からどのような授業づくりが必要かを考えた。

工夫 ■ 視覚的教材の活用や	一人ひとりの実態に応じて、視覚的教材や ICT を活用し、学習の充実を図る。  例) 絵やペーパーサートの活用、プレゼンテーションソフトを活用した教材の利用、PC などを活用した情報保障の活用、字幕放送の活用など
取り組み ● 児童が主体になった	一人ひとりの実態に応じて、児童が自発的かつ能動的に、自分の意思によって学ぶための創意工夫を行う。  例) 児童が考える時間を設ける、友だちと協力し課題に取り組ませる、児童に質問して考えを促すなど

表 1 合理的配慮の視点

視点	説明
児童の体験を踏まえた指導 ◆	一人ひとりの実態に応じて、感覚と体験を踏まえた学習活動を通して、学習を深めるための指導を行う。  例) 経験したことを日記・作文などにまとめる、話し合いの内容を確認するために書いたものを提示し読ませるなど

2 研究概要

本校小学部では、前述の目標を達成するため、合理的配慮を表 1 のように定義し、その視点に沿った指導と評価を行うことにした。

研究テーマを達成するために、指導案の様式には、合理的配慮の視点からどのように授業を進めるかを書く箇所を設けた。各視点に◆■●のマークを定め、記入する形をとった。さらに、研究授業・公開授業当日に参観したときに、一人ひとり

の児童の実態を把握しやすく、指導の重点が明確になるような指導案を作ることをめざした。

また、授業の評価のために参観者が記入する「授業アドバイスシート」を作成し、その中で3段階評価・コメントの記入、研究テーマを達成したかどうかを評価する欄を設けた。また研究授業の後に研究討議会を実施し、「授業アドバイスシート」の評価を基に意見交換を行い、指導力の向上も図った。

### 3 研究方法

本校小学部では児童の実態に応じた研究グループを設立し、低学年（1～3年）、高学年（4～6年）、重複（児童間の課題差が大きく見られるグループ）の3グループとした。それぞれのグループで研究授業を1本実施し、指導案の検討会と授業後の研究討議会を行った。各グループの研究授業の詳細は表2の通りである。

グループ	学年、教科、単元名【教材名】 〈本時の目標〉	指導上の留意点における合理的配慮の視点 (◆■●は前述の合理的配慮の視点を参照)
低学年	2年 国語 昔話を紹介しよう【かさこじぞう】  〈家の中のじいさまとばあさまの様子を読み取り、ばあさまの人柄を想像することができる。〉	◆劇化から、ばあさまの気持ちがどんなだったかに気付かせる。  ■ワークシートの書き方が分からない場合は、文の作り方を掲示する。  ●■書画カメラを用いて、ワークシートの内容を友だちにもわかるように掲示し、発表させる。
高学年	5年 外国語活動 I like apple. [Hi.friends! 1]  〈好きなものや嫌いなものについて、積極的に伝え合おうとする。〉	◆ ASL（American Sign Language）を交えて全員に挨拶をする。次に個別に分かれて数名の児童に挨拶をするよう声かけをする。  ■単語カードで黒板に提示されているものをT2と一緒に絵カードで確認する。  ●絵カードを使って活動に参加できるようにする。

重複	6年 家庭科 広島のおこのみやきの作り方を知ろう  〈広島のおこのみやきの作り方や材料を知る。〉	◆絵カードを掲示し、自分の考えを発表させる。  ■広島のおこのみやきの作り方を大型モニターの動画で確認させる。  ●自分で選んだカードと比較し、違うところを見つけたら発表させる。
----	---	---

表2 各研究グループの研究授業

### 4 成果と課題

各研究グループの児童の実態を考慮し、合理的配慮の視点から児童が自ら学ぼうとする授業の流れ、留意点を考えることができた。

低学年グループでは、児童と一緒に劇化を行い、その中で感じた体験を踏まえて児童が登場人物の気持ちを考える授業へつなげることができた。

高学年グループでは、ワークシートや絵カード、掲示物などを友だち同士でインタビューし合う活動の中に活用させることで、児童が主体的に学習に取り組む授業へつなげることができた。

重複グループは児童に見通しを持たせるために、大型モニターや絵カードなどの視覚的教材の掲示と組み合わせることで進め、児童が主体的に学習に取り組む授業につなげることができた。

指導案に、研究テーマと単元との関わりについて記入することにより授業者が合理的配慮を踏まえた授業をどのように進めていくかを明確にすることができた。また授業アドバイスシートを活用することで、参観した他の教員からの意見を授業者に還元でき、自身の授業を見直すきっかけとなり、指導力を向上することができた。このように、「自ら学ぼうとする子どもを育てるための合理的配慮とは」の研究テーマを達成する授業づくりに取り組んできた。反省として児童が主体的に考え学習に取り組んでいくにあたって、教員がすぐに答えを伝えるのではなく、児童が主体的になって課題や結果を見出せる授業づくりが課題である。今後は教員からの知識伝達を中心とした学習から脱却し、児童が主体的かつ対話的に課題解決に取り組んでいく学習のあり方に変え、合理的配慮を十分に視野に入れて取り組んでいきたい。

